

越前朝倉氏の軍勢を撃退した国吉籠城戦

国吉城は、若狭守護大名武田氏の重臣であった粟屋越中守勝久によって弘治2年(1556)に築られました。永禄6年(1563)からの約10年間、攻め寄せる越前朝倉勢を相手に壮絶な籠城戦を繰り広げたことで有名です。

元亀元年(1570)4月、信長が進み、家康が戦い、秀吉が守りそして、浅井三姉妹の運命を変えた、越前金ヶ崎城・天筒山城の戦い。この時、織田方の最前線の城として、越前攻めの戦略が練られたのも、この国吉城です。

4月20日、越前朝倉氏を攻めるため、京を出陣した織田・徳川連合軍は、琵琶湖西岸を北上し、22日に若狭国熊川に入り、翌23日、城主、粟屋勝久が信長勢を倉見峠まで出迎え、共に国吉城に入ったといわれます。

信長は国吉城で軍議を重ね、25日、越前国に向けて出陣しました。天筒山・金ヶ崎の両城を瞬く間に攻略しましたが、妹婿である北近江の浅井長政の裏切りで撤退を余儀なくされました。しかし、木下藤吉郎(豊臣秀吉)らの殿戦によって無事退却した信長は、同年6月の姉川の戦いで浅井・朝倉軍を打ち破りました。



三英傑が天下へ飛躍した北陸口の戦い

織田信長の死後、天正11年(1583)3月、信長の後継をめぐる、信長の敵を討った羽柴秀吉(豊臣秀吉)と、織田家の筆頭家老で越前を治めていた柴田勝家が、近江賤ヶ岳で激突しました。戦に破れた勝家は、再婚した織田信長の妹で浅井三姉妹の母、お市と共に北ノ庄城で自刃し、残された三姉妹は秀吉に保護されました。国吉城はこの時、秀吉に味方する丹羽長秀の配下にあつて、越前口の最前線として城の改修が行われました。

粟屋氏以降、木村常陸介定光が城主の時に城下町の整備が進められ、今に残る佐柿の町が開かれました。

慶長5年(1600)10月、関ヶ原の合戦の前哨戦となった大津籠城戦の活躍によって若狭一国の国主となった京極高次は、要衝国吉城に重臣の多賀越中守を入れました。高次は、町の入口に関所を設けるなど、佐柿の町の整備に力を入れ、慶長9年(1604)の大火で町が灰燼に帰しましたが、直ちに復興されました。

